



北海道バスケットボール協会
指導者育成専門委員会
2008 / 1 / 28(月)

タクティクス (HBA指導者育成専門委員会ブログ)

NO. 15

今年3月に東京で行われるジュニアオールスター大会の男子ヘッドコーチに就任した厚別北中学校の高橋和也先生から選抜選手選考の経緯や大会に望む決意を書いていただきました。

最近当ブログのカテゴリーに偏りがあるとの噂を聞いていますが、中学校の先生たちの原稿が多いことは否めません。原稿を依頼したら気軽に受けてくれることもあって只今のところ中学校の指導者が目立っていますが、長い眼で見ていただいて、今後他のカテゴリーの方にも大いに登場していただくつもりです。

テーマ「選抜(オールスター)の選手を預かって」

札幌市立厚別北中学校 高橋 和也

昨年、北海道選抜男子チームは見事に16年振りの全国優勝を成し遂げました。たとえ選手が大幅に入れ替わろうとも、好成績を収めた翌年は周囲からの期待はより一層大きくなります。「今年は大変だろうな…」と他人事のように思っていると、9月末にジュニア連盟強化委員会からヘッドコーチの要請がありました。多少のプレッシャーを感じましたが、北海道の優秀な選手を預かる立場につき、なおかつ「連覇」を目指すことができるというのは身に余る光栄であり、引き受けることを即決しました(笑)。いよいよ1月末より選抜チームが始動します。一次合宿から最終選考までの期間を振り返って、標記のテーマで執筆してほしいという依頼がありましたので、稚拙ながら自分自身の思いを文章にしていきます。

まずヘッドコーチとしての選抜チームとの関わりは、10月の一次合宿に参加するメンバーの名簿をもらうことから始まります。私は強化委員会に属していないので出席していませんが、参加メンバーは各地区連盟から推薦された選手を強化委員会で選考して決定しています。遠慮されているからか、地区連盟によっては推薦ゼロという形で強化委員会に報告が上がってくることも珍しくはないようです。その後、風の噂でどこそこが良い選手がいる…という話を耳にし、実際に新人大会での活躍を目にすると「なぜ、この子が推薦されなかったのだろうか？」と疑問に思うことがあります。前年度の学年別大会の結果が考慮されているとは言っても、各地区から最低1名は参加することが可能でしょう。エンデバーの考えに忠実に則り、各地区における夏季練習会をしっかりと行って一次合宿への推薦者を出して欲しいと切に思います。優秀な人材を埋もれさせないためにも、教える立場ではなく、子供の立場でお願いしたいところです。

参加メンバーがわかると、次にチーム構想に取りかかります。全国で勝つためにはどんなチームにするべきか、そのためには選手にどんなことを要求するべきかを考えます。昨年度全国優勝の原動力となった平野君(東海第四)、西島君(帯広緑園)といった強力なインサイドの軸になる選手が本年度の参加メンバーには残念ながらいません。そこで、当然の事ながら「走ること」に主眼を置いて一次合宿は臨むこととなりました。

また、今年は数年振りに一次合宿から二次合宿に進む際、メンバーを30名から20名程度に絞るという指針が出ていました。これは全員が二次合宿に進むという形ではその弊害といってもよい緊張感のなさが練習だけでなく合宿生活においても多々見受けられるようになったからようです。反対意見もあるかもしれませんが、今年は何の問題もなく合宿を終えることができました。1日目から3日目まで走り抜きましたが、選手のモチベーションはほとんど落ちることなく、最後まで声を出して頑張り抜きました。

もちろん、過密スケジュールの中で選手がケガしてしまっただけでは母体チームに合わせる顔がなくなります。ウォームアップ、ストレッチ、クールダウンには十分に気を遣いました。幸い宿泊先となった秩父別は温泉もあり、食事也十分だったので、1名の捻挫を除いては大きな事故なく一次合宿の全日程を終えることができました。ただ、最初からコンディションが十分ではなく、合宿入りした選手が数名。中でも単純な捻挫や打撲といったものではなく、疲労の蓄積によって負傷している選手も何人かいたのは気になりました。北海道選抜は最終的には、ほんの12名で構成するのですから、ケガや病気が最も怖いと言えます。一次合宿の段階ですでに故障を抱えているのは非常に大きなマイナス要素です。ハードな練習に疲労やケガは付きものですが、思いきった休養を与えるのもコーチの力と言えます。特にジュニアの場合、子供達の将来も念頭に置かねばならず、コンディショニングのあり方については選抜だけでなく、各チームにおいても一考を要すると思われま

一次合宿の帰路で「良い形で終わったね。」とスタッフ間では言っていました。ここからがまた悩みの種です。1月に行われる二次合宿までは各チームの練習に託すわけですから。中には新人戦地区大会で早々に負けてしまったために、すっかり身も心も鈍ってしまう選手が出てくることもあるからです。そこで、二年前にヘッドコーチをもった際は一次合宿に参加した選手全員に新人戦のビデオを送るように求めました。送られてきたビデオを全て観て、選手一人ひとりに「二次合宿までの間にこんなことをやっておきなさい。」というアドバイスを手紙に書いて送ったのですが、「高橋は自分のチームのためにスカウティングをやっている！」と変な噂を立てられましたので今回は止めました(泣)。

あとは祈るような気持ちで二次合宿が始まる日を待ちます。もちろん選手達の頑張りを見るべく試合観戦は欠かしません。南北海道大会は自分のチームも出場しましたが、手が空けば試合を観ました。他のスタッフにもお願いして北北海道大会の試合もしっかり見てもらい、各試合のスタッツを受け取りました。決戦大会もほぼ全試合観戦し、子供達の頑張りを目に焼き付け、1月12日からの二次合宿に入りました。

万全な状態で臨んでくる子もいれば、やはりそうでない子もいます。私にも経験がありますが、能力の高い子を預かるとかえってコーチが遠慮してしまっただけでその子の才能を伸ばせないことがあります。しかし、どんなに能力が高いとは言っても所詮は子供ですから、自分の限界に挑戦するほどストイックな取り組みはしません。子供の前にどんどんハードルを創り出し、夢中になって跳んでいる内にやがて一回りも二回りも成長させていくのはやはりコーチの仕事なのでしょう。能力が高ければ高いなりにやってあげなくてはならないことがある…。今回の合宿で私自身が再認識しました。

さて、二次合宿ではスリークォーターからの2-2-1ゾーンプレスからハーフコートに入ってマンツーマンというスタイルでスクリーメージを行いました。選抜選手を決める合宿でのマンツーマンはそれほどプレッシャーの厳しいものではないですから、いわゆるノ

一ガードでの殴り合いのようなゲームが続くことがあります。必然的にドリブルの連続のようなオフェンスになってしまい、それでは北海道選抜の選手として必要な技量や理解力がどこまであるかがわからないまま終わってしまう可能性があるのです。そこでゲームにもちょっとした変化を入れたわけですが、おもしろい発見がありました。まだまだ真似事のようなプレスでしたが、パスでつなぐ必要性が出てドリブルの連続による個人技ではなくなりました。また、自分のチームとは違うポジションや違う動きを求められてもすんなりできる子とそうでない子がやはりいることもわかりました。

また、トラップ(罠)に追い込むための「下がれ！」という指示や「頑張りすぎるな！」という指示に面食らう選手が多くいました。通常は常に「前に出る！」「頑張り！」と言われているところを、いきなりその逆を言われてビックリしたのではないのでしょうか。しかし、プレスディフェンスは単なる形でやってもうまくいきません。角度やタイミング、ねらいが必要なわけで、いわゆる指導本には載っていない部分を選手には懇々と教えました。

そして、3日間の二次合宿を終え、最後まで悩みに悩んで選手を選考して12名を決めました。落選した選手の指導者からは「あんまりじゃないですか！」と冗談半分、本気半分のコメントをもらいましたが、その気持ちは十分すぎるほど理解できます。その選手や指導者の気持ちも汲んで12名の選手とスタッフと共に全国二連覇を目指して頑張っていきます。3月に朗報をもたらせるよう全力で頑張る所存です。

なお、最後になりますが、ジュニアオールスター北海道選抜のスタッフには中学校の先生であれば誰もがなる可能性を持っています。「我こそは！」と思う方は地区強化委員会まで立候補してみてもはどうでしょうか。大変なことも多いですが、自分自身を磨き、自分の選手に還元していくこともできます。「強い北海道」を作るべく、共に頑張りましょう！

HBA（北海道バスケットボール協会）指導者育成専門委員会